1

八歳の冬、クリスマス・イブのことだった。道子は火事を見た。火元はすぐ近所の家の台所で、古い二階建ての木造家屋だったし、何しろ乾燥した時期のことだったから、火のまわりは残酷なほどに早かった。

当時、道子が家族と一緒に住んでいた公営アパートは、ちんまりとしたコンクリートの箱のような建物で、道子たちの四〇一号室は四階の角に位置していた。ベランダに出て下を見おろすと、アパートの狭い裏庭の頭ごしに、近所の家々の屋根を見渡すことができた。だから火事の時にも、北風に乗って流れてくる煙を我慢しながら、道子は両親と兄と四人でベランダにいて、燃える家を見つめていた。兄はくしゃみばかりしていて、父は険しい顔で、様子によってはうちも避難し

なくちゃならないからと、道子たちを着替えさせた。母はいちばん呑気で、火はここまで来やしないわよ、それにしてもよく燃えるわねえと、感心したような声をあげていた。

その家はシロタさんと言って、道子より三歳年上の長男を頭に、五人の子供たちがいた。屋根にはところどころ白漆喰で補修した跡があった。そこではよく赤トラの猫が昼寝をしており、春先など、子猫が二、三匹くっついていることもあった。とても可愛くて、ベランダからずっと眺めていても、少しも飽きることがなかった。

シロタさんの子供たちは、五人もいるのに、そのうちの一人も、道子とも兄とも同じクラスにならなかった。集団登校のグループも別々だった。一緒に遊んだことがないし、口をきく機会もない。ただ、シロタさんの小母さんは保険の外交員をしており、何度か家に訪ねてきたことがあったので、道子も顔を見知っていた。丸顔で明るい茶色の髪で、小柄な小母さんだった。

ある時、あれは小母さんのうちの猫ですか、なんて名前ですかと尋ねると、小母さんはくしゃくしゃな顔をしてしきりと手を振り、あれはうちの飼い猫じゃないのよ、野良猫が図々しく居座ってるのよ、だから名前もないのと答えた。

「居候してるだけじゃなくて、毎年、勝手にうちの軒下で子猫を産むもんだから、困ってるの。早いところどっかにうっちゃってこなくちゃねえ」

シロタさんの小母さんが帰ると、母が怖い顔をして道子をにらみ、あんた、猫を飼いたいなんて言わないでよね、団地では禁止なんだからねと叱った。道子はおとなしく叱られていたが、心の内では、シロタさんの猫が本当に〝どこかにうっちゃられて〟しまったら、拾ってきて内緒で

飼おうと決めていた。学校のそばの缶詰工場の裏がいい。通学の通り道だし、空いた木箱がたくさん転がっているから、それを猫のおうちにしてやればいいと思った。子猫がたくさん生まれても、木箱はたくさんあるから大丈夫だ。

シロタさんの家が火事になったのは、それからほんの数日後のことだった。だからなおさら、道子は火事のことをよく覚えているのだ。本当のことを言うと、シロタさんの家の人たちのことよりも、猫のことの方がずっと心配だった。

高いベランダから火事の様子を観察しながら、母は父に、シロタさんのところは父親が家出をしており、子沢山なのに奥さんが一人で稼いでいるということ、気むずかしい舅さんが同居していて、それも大変だということを、説明して聞かせた。道子は、お父さんは市役所にお勤めしているのだから、町の人たちのことは何でも知っており、だからそんな話は、お母さんから聞かされなくてもとっくに承知しているんじゃないかと思っていた。が、父はふんふんと母の話を熱心に聞き、子供たちは逃げ出せたろうか、手伝いに行った方がよかろうかなどとぶつぶつ言った。そうして、もう消防車が来てるんだから、素人が手伝うことなんかないわよ、わざわざ危ない目に遭いに行かないでくださいと、母に強く叱られた。

真っ赤な炎は、遠目で見るとちっとも危険そうではなかった。透き通ったきれいな赤い布が、窓という窓からひらひらとはためいているだけのように見えた。やがてその布がシロタさんの家の屋根まで届くくらいに高々とひらひらし、家全体を包み込むようになると、もっともっときれいな感じがした。それなのに、消防車が駆けつけて、長いホースで水をかけ始めると、とたんに

煙がたくさん湧いて出てきて、いきなり、全てがきれいではなくなった。ただ煙たくてクサいだけになった。道子と兄はベランダから部屋のなかに戻されたが、念のため、まだパジャマにならないでもう少し待っていなさいと言われた。

「お兄ちゃん、シロタさんの猫、逃げれたよね？」

道子の問いかけに、兄は思いっきりバカにしたような顔をして、

「そんなこと、オレが知るもんか」と、冷たく言い放った。「それから、逃げれたじゃない。逃げられたって言うんだ」

兄はすっかり火事への興味を失ったようで、テレビを点け、そのまん前に陣取ると、次から次へとチャンネルを切り替え始めた。今思えば、あの年頃の道子たちは、大晦日だって、あんなに遅くまで起きていたことはなかった。兄にしてみれば、深夜に放送されているテレビ番組を見る、得難いチャンスだったのだ。

兄がかまってくれなくても、道子は猫のことが心配で、落ち着かなかった。両親はまだ手すりから乗り出すようにして火事を見守っているが、道子はいったん部屋に戻されてしまったのだから、またのこのこ出ていけば、きっと叱られるだろう。道子の両親は、親の言いつけを守らない子供には、とても厳しい人たちだった。

うじうじ悩んでいて、はっと気がついた。お手洗いの窓から外をのぞけば、ちょっぴりだけど、シロタさんのうちの裏側の方が見えるはずだ。かなり背伸びをしなくてはならないし、薄暗くて寒いだろうけれど、幸い、ちゃんと厚着をしている。道子はそっとお手洗いに向かった。便器の

脇に立って窓の取っ手を押し上げ、うーんと背伸びをすると、窓枠の下側から、かろうじて二センチくらい、目をのぞかせることができた。

シロタさんの家の裏側は狭い路地になっていて、消防車も入ってこられない。路地を隔てた家の人たちは逃げてしまったのか、明かりが点けっぱなしになっている。シロタさんの家はもうもうと立ちのぼる煙に包まれていたけれど、炎の赤い布は切れっぱし程度の大きさに縮まり、焼け落ちかけた家の壁の隙間や窓のそこここで、意地悪なトカゲの舌のようにチロチロと出たり入ったりしていた。

そのとき、ひときわ強い北風が吹いて、煙を押し流した。真っ黒焦げになったシロタさんの家が、一瞬だけ煙の包囲から解放されて、無惨な姿をむき出しにさらした。そのとき、道子は見た。

シロタさんの家の裏側の二階、きっと階段の上あたりだろう、小さな明かり取りの窓の向こうに、誰かがいた。黒い人影がはっきりと見えたのだ。その誰かは踊っていた。嬉しくて楽しくてしょうがないというように、両手を頭の上にあげて振りながら、右へ左へ身体を傾けて踊っていた。

へんてこな踊りだった。どうして火事の家のなかで、誰が踊っているというのだろう？　筋道立った理屈は欠けていても、何か本能的に、とてもイヤなものを見たという直感が働いて、道子はさっと目を引っ込めた。

苦しいほど、心臓がどきどきしていた。背中は汗びっしょりで、背伸びをしていたせいでふくらはぎが痛かった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。